



第28回定期演奏会に向けて

今年度の出雲フィルハーモニー交響楽団による定期演奏会が9月に迫ってきました。猛暑の中、公演に向けて関係者がそれぞれの立場で頑張っているところです。

公演プログラムは3曲で構成されますが、「出雲讃歌」とブラームス作曲の「交響曲第2番」を深掘りしてみたいと思います。

出雲讃歌の誕生と歩み

頌歌《天地のるつぼ》—出雲讃歌— の誕生は、出雲市市制施行60周年を前に、これからの出雲の文化を創造し語っていくために、心の通う、魂を揺さぶられるような市民の歌の委嘱作品の構想が生まれたのが始まりです。

出雲市は全国レベルを誇る合唱の地であり、地域の指導者からの提案を受け、作曲を鈴木輝昭氏に依頼することが決まりました。鈴木氏の推薦もあり作詩を大岡信氏へお願いしたいという希望を受けました。全体構想は、このような経緯をたどり決定されました。

1999年（平成11年）当時の出雲市長が大岡氏宅へ訪問され、翌年2000年（平成12年）には作詩家、作曲家の両名が来雲され、年末に詩が完成しました。それを受け、作曲が開始されました。

2001年（平成13年）11月、出雲市市制施行60周年記念式典（旧出雲市）において、ピアノ版による第1章と第4章が上演されました。

2002年（平成14年）3月、出雲フィルハーモニー交響楽団スプリングコンサートにおいて、作曲家自ら指揮棒をとり、管弦楽版が世界初演となりました。その際には、作詩家大岡氏も来雲されています。

その後、隔年での演奏を目指す方針が決まり、2022年（令和4年）まで継続されることになります。（途中都合で3年おきや2020年はコロナ禍で公演が中止）

出雲讃歌の歴史は以上のような経緯をたどり今日まで受け継がれています。今回は4年ぶりとなりますが、本アカデミー合唱関係の講座受講生に加え、一般公募による参加者を迎えて100名の大合唱団が出来あがりました。

さらに、オーケストラの団員約100名と総勢200名の出雲でしか味わえない壮大なステージが実現いたします。お楽しみください。



※参考文献：出雲の春音楽祭2022プログラムより





ブラームスを読み解く…！

ブラームスの生い立ちは、小間物商を営む元コントラバス奏者を父に、**1833年**ドイツ・ハンブルクで生まれました。父親からヴァイオリンの手ほどきを受け、7歳からピアノを学びました。その進歩は目覚ましく、10歳の時に公開演奏をするほどの腕前でした。しかし、家計が貧しかったこともあり、13歳頃から酒場などでピアノを弾いて生活を助けなくてはなりませんでした。

1853年にシューマン夫妻に会い、その才能を認められ世に出るきっかけを掴むことになります。**1855年**、「交響曲第1番」の作曲を開始します。

その間には、合唱団の指揮をしたりピアニストとして活動しています。**1862年**、ブラームスはウィーンに移住します。移住してから古典主義の伝統を尊重する中で作品を書き続けます。

1872年からは、ウィーンの楽友協会の芸術監督となりました。

1876年、「交響曲第1番」が21年の歳月を経、完成されます。何故、21年もかかったのかは、先人のベートーヴェンの不滅の9曲の交響曲があるゆえの葛藤があったのではないかと解説しています…。ブラームスは、古典主義の継承にこだわると共に、特にベートーヴェンを意識して、かつ、真似事にならないよう苦勞を重ねているうちに21年もの歳月が流れたのではないかと資料を読みながら感じました。ベートーヴェンの交響曲の特徴は、「苦悩を通じての歓喜」や「闘争のあとの勝利」といった思想を表現していますが、ブラームスも「交響曲第1番」では「苦悩を通じての歓喜」が伺えます。この最初の交響曲は聴衆から大成功に受け入れられ、ベートーヴェンにはないものが示せたという自信を持てたことに違いないと推察されます。そのことから、「交響曲第2番」は4ヶ月足らずで完成されていることから伺えます。

1877年6月、ヴェルター湖畔のペルチャッハに避暑に出かけました。そこで、「交響曲第2番」の作曲が着手され10月には完成。ブラームスは、作品に作曲時の風光や環境を反映させるタイプの作曲家であり、お気に入りのペルチャッハと静かな湖畔の雰囲気を取り入れて、「交響曲第2番」は柔和で温和で、人間的な深みと温かく喜ばしい気分にも富むものとなっていると解説しています。そのため、この曲は、ブラームスの《田園交響曲》と呼ばれることもあるそうです。

そして、医者で友人のビルロードは、この曲を聴いて次のような手紙を送っています。

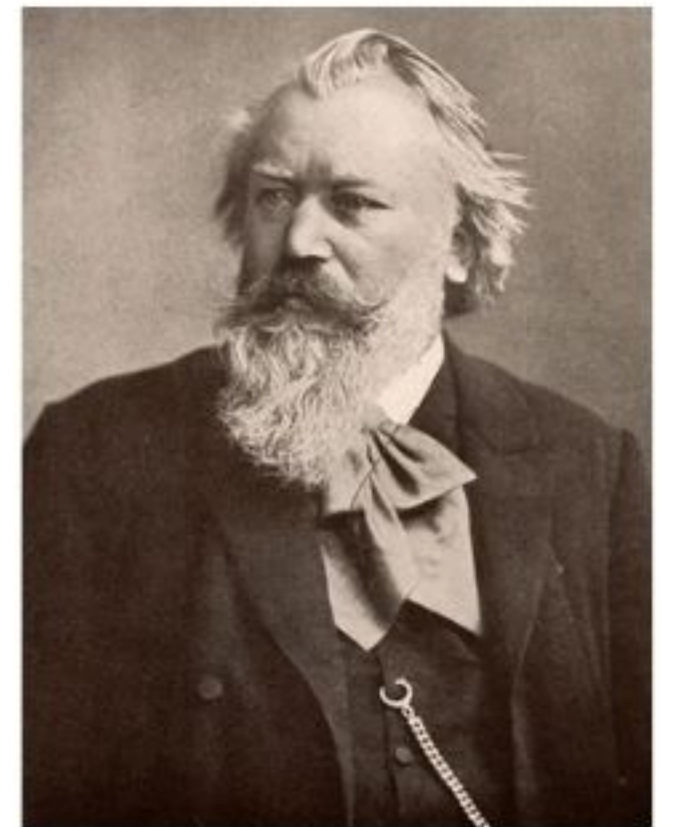
「幸福な、喜ばしいムードがこの作品全体にあふれている。そこには、完全性がはっきりあらわれて、清澄な思考とあたたかい感情が無理なく流れている。……ペルチャッハとはどんなにか美しいところなのだろう。」

この「交響曲第2番」はブラームスの4曲の交響曲の中で、もっとも田園的ですが、また、もっともウィーン的だといわれることも多いそうです。

特に第1楽章の3拍子は、ウィーンのワルツの趣をたたえています。それから、曲には全体の統一的契機となる基本動機のようなものがあり、それは、第1楽章の冒頭の低弦からの〈二〉→〈嬰ハ〉→〈二〉と進行する3つの音から成る動機です。これが全体を統一する役目をしていると解説しています。

また、「交響曲第2番」は、各楽章が明るい長調で書かれていることが特色であるとも言っています。このようなことから、「交響曲第2番」はブラームスの生涯でもっとも心が安定し幸せに満ちている時期であったことが伺えます。

今回の定期演奏会では、そんなブラームスの心情が表現できるといいですね…。





つぶやきコーナー

このコーナーはアカデミー関係者が普段から考えていることや思いをつぶやいていただきます。

iPhil定期演奏会の成功祈願をしてきました！

今回のオイコスの冒頭に桑原学長が「**出雲讃歌の誕生と歩み**」を掲載されています。作詞をされた大岡信氏は、出雲の文化的深さを表現するのに、古代出雲への畏敬の念をもって出雲神話を大切にされていることがわかります。

さて、出雲神話のなかでもよく知られているのが^{くにゆず}国譲り神話、アマテラス（天照大神）から国譲りを迫られたオオクニヌシ（大国主命）は、その答えをわが子コトシロヌシ（事代主神）に託し、国譲りされることになります。

このコトシロヌシはえびす様とも呼ばれ、豊漁の神、商売繁盛の神様としてあがめられることが多い神様ですが、松江市美保関町の**美保神社**では**ミホツヒメ（美穂津姫命）**とともに**音楽の神様**として^{まつ}祀られています。

美保神社のパンフレットによれば、古来より「ご祭神は鳴り物がお好き」という信仰から数多くの楽器が奉納され、その中の八四六点が国の重要有形民俗文化財で、今もなお楽器や歌舞音曲（音楽）の奉納が絶えないとのこと。

拝殿は、船庫を模した独特な造りで壁がなく、^{はり}梁がむき出しの上、天井がないのが特徴で、優れた音響効果をもたらしているとか。鳴り物をお好みになるご祭神への崇敬から年間を通して音楽の奉納も数多く行われているそうです。

そんな音楽の神様が祀られている美保神社へ、iPhil定期演奏会の成功祈願にお参りしてきました。

今回の演奏会に出演される200名の皆様が、美しいハーモニーを響かせて素晴らしい演奏会となりますように、そして火災や地震、戦争など暗いニュースが続く中で、市民の皆様が少しでも明るく、心豊かな気持ちになってもらえる演奏会になりますようにお祈りしました。

出雲市芸術文化振興財団 文化事業部長 橋本 孝

美保神社について



←**拝殿と本殿**右側の**本殿**に**ミホツヒメノミコト（美穂津姫命）**がお祀りされています。五穀豊穡、夫婦和合、安産、子孫繁栄、歌舞音曲（音楽）の守護神としてあつく信仰されています。



↗**左側の本殿**に**コトシロヌシノカミ（事代主神）**がお祀りされています。海上安全、大漁満足、商売繁盛、歌舞音曲（音楽）、学業の守護神としてあつく信仰されています。



↑**拝殿の中**は壁も天井もありません。年間を通して音楽の奉納が数多く行われるそうです。



←多くの鳴物（楽器）が奉納されていますが、その中で最も大きな鳴物「**大鑓（おおどう）**」。※鑓は太鼓のこと。毎朝八時半の朝御饗祭（あさみけさい）や特定の祭典に限り使用されます。神職以外は手を触れることが許されないそうです。



ギャ
フ
ラ
オ
リ
ト
ー

